# スペイン王国上院の招待による同国公式訪問及び各国の政治経済事情等視察
# 参議院議院運営委員長一行報告書


団　　長　参議院議院運営委員長
山本　順三
参議院議員　大家　敏志
同　古賀友一郎
同　末松　信介
同　里見　隆治
同　芝　博一
同　　行　委員部議院運営課長
北脇　達也
参事　上村　隆行
同　松井　新介


## 一、始めに

本議員団は、スペイン王国上院の招待により同国を公式訪問するとともに、各国の政治経済事情等を視察するため、平成三十年八月三十日から九月六日までの八日間、フランス共和国及びスペイン王国の二か国を訪問した。

日程は次のとおりである。

八月　三十日　東京発パリ着（二泊）
三十一日　フランス共和国上院訪問
ダヴィッド・アスリーヌ上院仏日友好議連会長･上院副議長との会談
国立公文書館パリ館視察
ジャポニスム二〇一八展示（チームラボ展）視察
商工会関係者との意見交換
九月　一日　パリ発バルセロナ着（一泊）
サグラダ・ファミリア視察
在留邦人との意見交換
二日　バルセロナ発マドリード着（三泊）
三日　スペイン王国上院訪問
ピオ・ガルシア＝エスクデロ・マルケス上院議長との会談
国立行政文書館視察
在留邦人との意見交換
四日　再生可能エネルギーオペレーションセンター視察
五日　マドリッド日本人学校視察
マドリード発（機中泊）

六日　東京着

## 二、フランス共和国

### （一）ダヴィッド・アスリーヌ上院仏日友好議連会長･上院副議長との会談

議員団は、アスリーヌ上院仏日友好議連会長・上院副議長（野党、社会党）のほか、フレデリック・マルシャン同議連副会長（与党、共和国前進）、ギヨム・ゴンタール同議連理事（野党、共産党・環境主義）と会談した。

冒頭、アスリーヌ会長から、議員団の訪問に対し歓迎の意が示された。また、平成三十年七月豪雨により愛媛県など西日本を中心に大変な被害が起こり、尊い人命が失われたことに対し、お見舞いの言葉を述べるとともに、迅速な復旧を祈念しているとの挨拶があった。

山本委員長から、まず、お見舞いの言葉に対し感謝の意を示した上で、アスリーヌ会長が、本年春の叙勲で旭日重光章を受章されたことについて祝意を伝えるとともに、同会長が長年、日仏関係の強化のために尽力されたことに敬意を表した。また、本年は、日仏修好通商条約の締結から百六十年の節目の年であり、日本の芸術・文化に最も理解を持つフランスとの更なる友好関係、そして議会間の交流を深めるため、今回訪問したとの挨拶があった。

アスリーヌ会長から、現在、フランス議会において、国民議会（下院）は、マクロン大統領が率いる共和国前進が過半数の議席を有する一方、上院は野党が優勢であるため、いわゆるねじれ国会となっている。前国会においては、全ての議案が下院の先議であったため､会期末に審議時間が足りない状況となった｡また、上院として、電子投票制度の導入を考えており、来年の三、四月頃に議連として訪日を検討しているので、その際は参議院の押しボタン式投票システムを視察したいとの発言があった。

アスリーヌ会長の発言を受けて、山本委員長から、参議院の押しボタン式投票の概要について説明を行うとともに、同会長の訪日実現の期待を述べた。また、日本においては、二〇一九年にラグビーワールドカップ、二〇二〇年にはオリンピック・パラリンピック競技大会がそれぞれ開催される。これらを一つのイベントで終わらせることなく、両大会後のまちづくりや国づくりにどのように役立てられるのか、また、スポーツや芸術に大きく寄与できるのかを考えることが重要であるとの発言があった。

山本委員長の発言を受けて、アスリーヌ会長から、両大会の次の開催地はいずれもフランスであるので、日本の取組には注目している。また、山本委員長の指摘のとおり、両大会の成功のみでなく、その後をにらんだまちづくりが課題である。近年、オリンピックの開催に伴う費用は高コスト体質となっているため、そうした観点からもこれらの計画や効果などについて、今後、議員間で議論を続けたいとの発言があった。

このほか、議員団から、マクロン大統領誕生後のフランスの政治動向、日本と

フランスの都市交流事業等について質問があり、アスリーヌ会長、マルシャン副会長から回答がある一方、フランス側から、北朝鮮情勢、日ＥＵ経済連携協定（ＥＰＡ）の今後の展望等について質問があり、山本委員長から回答があった。

会談に先立ち、アスリーヌ会長の案内により、議場等の上院施設を視察した。

**（二）国立公文書館パリ館視察**

ピエール・フルニエ国立公文書館文化教育活動部責任者から次のような説明を受けるとともに、施設内を視察した。

フランスにおいては、文化通信省が公文書管理制度を所管するが、同省管轄の中央行政機関に属する総局の一つである文化遺産総局の下に、フランス省庁間アーカイブズ部があり、そこが国立公文書館を始め、地方自治体公文書館、その他合わせて約八百の公文書保管施設を統括している。

国立公文書館は、パリ館、フォンテーヌブロー館、そして二〇一三年一月に開館したピエールフィット＝シュル＝セーヌ館を加え、三館体制となったところであるが、そのうちパリ館については、一八〇八年より貴族の旧宅を文書館として使用し、フランス革命以前の文書及びパリ市公証人の文書等を保管している。

同公文書館の保管資料のうち、最も古い文書は六八七年のものであり、他に十四世紀から十八世紀の間の裁判所や議会の古い記録などがあるほか、一メートル原器、ナポレオンの遺書、フランス革命以降の憲法や人権宣言など、貴重な現物資料が所蔵されている。

また、議員団から、所蔵資料の電子化に向けた取組の現状や同公文書館の人員等について質疑が行われた。

**（三）ジャポニスム二〇一八展示（チームラボ展）視察**

下山雅也パリ日本文化会館ジャポニスム事務局長から次のような説明を受けるとともに、プログラム・エンジニア、数学者、建築家、デザイナーなど様々なスペシャリストから構成されているウルトラテクノロジスト集団「チームラボ」が手掛ける大規模なデジタル・アートの展覧会を視察した。

ジャポニスム二〇一八は、日仏友好百六十年を記念し、二〇一六年五月に安倍内閣総理大臣とオランド大統領（当時）の合意により、日本文化の素晴らしさを世界へ発信する取組として、パリ内外の百近くの会場で展覧会や舞台公演など様々な文化芸術を紹介するイベントが約八か月にわたって開催されている。

そのうちチームラボ展には､約二千平米の巨大なデジタル･アート空間の中に、子供たちの塗り絵が動き出す作品、カラスが空間を飛び回る作品、触れることで水の流れが変わり、花が咲く、高さ十一メートル・横幅二十六・五メートルの巨大な滝を描いた作品などが展示されている。同会場では子供連れの家族を中心に長蛇の列ができており、フランスにおける本展示への関心の高さがうかがえた。

## 三、スペイン王国

### （一）ピオ・ガルシア＝エスクデロ・マルケス上院議長との会談

冒頭、ガルシア＝エスクデロ上院議長から、議員団の訪問に対し歓迎の意が示されるとともに、二〇一三年に平田参議院議長（当時）招待により訪日した際、衆参両院から歓迎を受けたこと、また、当時は日本・スペイン交流四百周年ということで様々な行事が行われていたが、日本国民のスペインに対する愛情や文化への理解について感銘を受けたとの挨拶があった。

山本委員長から、会談の場を設けていただいたことに感謝の意を表するとともに、昨年一月にスペインを訪問し、同議長と会談を行った伊達参議院議長から言付かっている挨拶と感謝の言葉を伝えた。今回、初めての訪問となったスペインは、ヨーロッパの中で重要な地位を占めており、経済成長が堅調であること、また、女性の社会進出が進むなどの変革を遂げたことが印象的である。加えて、昨年四月にスペイン国王王妃両陛下が国賓として訪日されたことに言及しつつ、最近では、サッカー界においてイニエスタ、トーレス両選手が日本のクラブチームに所属するために訪日する一方、スペインでは乾、柴崎両選手が活躍するなど、両国の関係への関心や関係強化の機運が高まっており、二国間関係、また参議院とスペイン上院との関係を深めてまいりたいとの挨拶があった。

山本委員長の発言を受けて、ガルシア＝エスクデロ議長から、両国の良好な関係は、スペイン王室と日本の皇室との交流関係にも表れている。また五年前、私が天皇皇后両陛下に謁見した際には温かい歓迎を受けるとともに、両陛下のスペインのサラマンカという地方都市への思い入れを拝聴して大変感動した。山本委員長が言及した両国のサッカー選手の活躍も、二国間の良好な関係を示す好例である。加えて、我々は、経済・通商、国際問題に対しても親しい関係を持つ一方、今後、緊密になる分野としては観光が挙げられる。日本からスペインに年間六十万人程度の来訪があるが、スペインから日本には年間十万人程度である。これらは毎年増加しつつあるが、両国の魅力や人口等を考えると、更に発展する余地があるとの発言があった。

ガルシア＝エスクデロ議長の発言を受けて、山本委員長から、日本は観光立国の実現に向け、外国人観光客を増やすための政策を講じるなど積極的に取り組んでいる。その結果、本年の外国人観光客は年間三千万人を超える勢いであり、スペインからの観光客も増えるよう努力してまいりたい。また、二〇一九年にラグビーワールドカップ、二〇二〇年には東京オリンピック・パラリンピック競技大会がそれぞれ日本で開催される。これにより多くの外国人観光客が訪日することから、日本の素晴らしい文化等をアピールする絶好の機会であると考えているとの発言があった。

なお、会談後、議場等を視察した。

### （二）国立行政文書館視察

メルセデス・マルティン＝パロミノ国立行政文書館館長から次のような説明を受けるとともに、施設内を視察した。

同文書館は、スペイン国内に六か所存在する国立文書館の一つで、主に十九世紀から二十世紀の行政文書を保存しており、世界で三番目の規模を持つ。同文書館では、公文書の収集、整理、保存等を行い、必要に応じ情報提供を行う役割を担っている。

また、二〇一一年に制定された政令により、全ての行政府が公文書をどのように保有するかが規定されるとともに、専門家で構成される公文書を評価する上級委員会が、文書の破棄、あるいは永久的な保存を決めることとなる。すなわち、公文書は各行政機関に設置された書庫で定められた期間保有される。次いで、作成後十五年が経過したものは国立行政文書館に移管され、更に二十五年が経過したもので上級委員会が歴史的価値を持つと判断されたものについては、国立歴史文書館に移管される仕組みとなる。こうした公文書管理体制の中、同文書館は、中間書庫として位置付けられている。

一方、同文書館は、書庫の収容能力が上限に達しつつあるとの問題を抱える。そこで、上級委員会と保管資料の取扱いを協議するほか、過去のフランコ政権下での公文書を整理し、国立歴史文書館に全て移管するなどの努力を行っている。

説明を受けて、山本委員長から、日本では昨今、国の公文書管理の在り方が大きな問題となっており、我々としても各国の公文書管理体制について関心を持っている。本日、説明を受けた内容については、今後の議論の参考にしたいとの発言があった。

**（三）再生可能エネルギーオペレーションセンター視察**

グスタボ・モレノ・グティエレス再生可能エネルギーオペレーションセンター長から次のような説明を受けた。

同センターは、スペイン最大手の電力会社であるイベルドローラ社の保有施設として、二〇〇三年に設立され、同社が発電する再生可能エネルギーの最適化を行うべく、スペインを始め、メキシコ、ブラジル等に展開されている発電設備のオペレーションとメンテナンスを一体化し、二十四時間、三百六十五日、全てリアルタイムでモニタリングの上、これらをリモートコントロールで行っている。なお、二〇〇八年には皇太子殿下も同センターを訪問されている。

スペインは、再生可能エネルギー大国であり、発電量に占める再生可能エネルギー比率は約三十％であり、中でも風力の比率が約二十％と大きい。同社も、その風力原動機を六千個以上保有しているが、例えば、国内の電気需要が低く、強風の場合は再生可能エネルギーの供給が増えるので発電設備を遮断し、また、風が弱い日には同設備を止めてメンテナンス作業を行うなど、各施設から送られる情報を基に同センターが適切に判断し、全体の効率を高めている。加えて、他の風力発電メーカーと技術提携を行うとともに、送電事業者の協力の下、再生可能

エネルギーをスペイン全国に安全かつ安定的に供給している。

説明を受けて、山本委員長から、我が国では、東日本大震災に伴う原子力発電所の事故が契機となり、再生可能エネルギーの意識が高くなっている。また、西日本での台風に伴う豪雨など自然災害が多いことからも、再生可能エネルギーの推進に取り組む必要がある。そうした観点からも、同社の施設に関する説明を受けたのは大変有意義であったとの発言があった。

また、議員団から、スペインにおける再生可能エネルギーの市場取引、電力会社の発送電分離の状況等について質疑が行われた。

**（四）マドリッド日本人学校視察**

マドリッド日本人学校の授業や施設を視察した後、堀内正樹校長から次のような説明を受けた。

同校は、一九八一年に設立され、本年九月一日現在の生徒数は、小学部九名、中学部八名の計十七名であり、一九九一年のピーク時（生徒数は百五十名程度）の九分の一となっている。教職員数は校長のほか文部科学省派遣教員六名、現地採用講師三名、事務員、用務員各一名の計十二名で学校教育に取り組んでいる。

同校には、現地の日本人会を始め、多くの者からの協力・支援を受けるためコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の要素が強いこと、生徒数が少ないため運動会や学内合宿など学校行事を全校生徒で行っていることなどの特徴がある。また、基本的には日本の教育課程に準じた学校教育を行っているが、スピーチや文章の作成を通じて日本語をしっかりと身に付けさせるとともに、抽象的・論理的思考力を養うことに重点を置いて授業を進めている。

同校が抱える課題として、学校運営に係る予算をどのように確保するかという点が挙げられる。近年の生徒数の大幅な減少などにより、授業料収入が低下し、予算が限定的なものとなっているため、例えば老朽化した施設の改修は、申請次第では政府から一定額の補助を得て対応できるものの、大規模な改修については慎重にならざるを得ないというのが現状である。

説明を受けて、議員団より、施設の改修のほか学校運営に当たっての要望等があれば教えてほしいとの発言があり、堀内校長から、国内でも教員が不足していることは理解しているが、派遣教員の増員を願うとの回答があった。

加えて、議員団より、生徒数減少の要因、バルセロナ日本人学校との連携状況、同校での読書への取組状況等について質疑が行われた。

**（五）サグラダ・ファミリア視察**

バルセロナにある建築家ガウディの未完の遺作として有名なサグラダ・ファミリアは、一八八二年に建築家ビリャールが着工し、翌年からガウディがその設計を引き継いだものである。現在も約一万七千平米の敷地内でガウディが残した設計図や模型を基に建設が続けられ、日本からスペインに渡った彫刻家で現在芸術

工房監督を務める外尾悦郎氏も、生誕ファサードの十五体の天使像の作成、門扉の作成設置、尖塔の果物の彫刻等を担当し、二〇〇五年には、その生誕ファサードと地下礼拝堂の部分がユネスコの世界遺産に登録された。

外尾芸術工房監督の案内の下、同教会を視察した。同氏の説明は、内外の建築、彫刻、装飾等の説明にとどまらず、ガウディの思想や哲学がどのようなものなのか、それが同教会の建築等にどのように反映されているのか、また、自分がどのような考えの下、建築等に従事しているのかなど、専門的知識のみならず、その高い見識に対して一同感銘を受けた。

**四、終わりに**

今回の訪問では、フランス上院仏日友好議連会長及び同議連に所属する上院議員、また、スペイン上院議長との会談を通じ、国政の重要課題等について相互の理解を深めることができた。

特に、フランス上院との交流では、現在、上院において電子投票制度の導入を検討しており、参議院の押しボタン式投票システムを一つの視察目的に来春にも訪日したいとの意向が示されるなど、次なる議会間交流への期待を膨らませるものとなった。

また、日本の国会において国の公文書管理の在り方が大きな問題となるとともに、憲政記念館の敷地内に新たな国立公文書館を建設する計画が進められている中、フランスの国立公文書館及びスペインの国立行政文書館を訪問したが、担当者からの説明や施設の視察を通じ、両国の公文書管理の歴史や現状、課題等について多くの知見を得ることができた。

さらに、訪問したパリ、バルセロナ、マドリードの全ての都市において日本企業のほか、現地に移住し、様々な分野で活躍している計二十一名の邦人の方々との意見交換を通じて、各国における政治・経済情勢及び日本との関係、現地での事業展開の労苦など、各国の事情や現地で活動していく上での課題や要望等について認識を新たにすることができた。

各国への訪問に際しては、木寺昌人在フランス大使、水上正史在スペイン大使、渡邉尚人在バルセロナ総領事を始め、在外公館員等多くの方々の協力を得た。

報告を終えるに際し、各国の議会及び訪問機関の関係者、在留邦人、在外公館の方々に心より御礼を申し上げたい。